

# 学位請求論文審査報告要旨

2024年2月14日

申請者 鈴木 英子

論文題目 話し言葉における副詞「やはり」の多角的研究

論文審査委員

石黒 圭

庵 功雄

小磯花絵

## 1. 本論文の内容と構成

日本語教育の教科書で教えられている表現と、現実の会話で使われている表現が異なることは少なくない。この現象は話し言葉で顕著に見られる。近年、急速に整備が進む話し言葉コーパスを用いて、現実の会話でどのような表現がよく使われているかという実態を実証的に明らかにする研究が増えつつあり、こうした研究成果が日本語教育のシラバスに好影響を与えはじめている。こうした研究動向のなか、本論文は、話し言葉で頻用される副詞「やはり」において、その使用実態を明らかにすることを企図する研究である。

副詞「やはり」は、現実の会話では「やはり」のほか、「やっぱり」「やっぱ」が頻用され、「やっぱし」が使われることもある。以下ではこの4形式を包括して副詞「やはり」と総称するが、こうした副詞「やはり」の4形式のどれを選んで使ったらよいのか、その使い分けは日本語学習者にとって難しい。また、副詞「やはり」は使われる文脈によって様々な機能を帯びるため、そのような多様な機能を踏まえて副詞「やはり」を会話のなかで適切に使用することもまた、日本語学習者にとって大きな課題である。

本論文では、形式選択の面でも機能選択の面でも使いこなすことが難しい副詞「やはり」の教育を考える基礎研究として、日本語母語話者の日常的な話し言葉を集めた『日本語日常会話コーパス (CEJC)』を用いて、副詞「やはり」の使用実態の解明に取り組んでいる。また、本論文の優れた点は、母語話者コーパスとは別に学習者コーパスを用いて、副詞「やはり」の日本語学習者の習得実態の解明を目指した点にある。世界各地の学習者が話す日本語を集めた『多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS)』、日本語学習者の習得過程を追跡した『北京日本語学習者縦断コーパス (B-JAS)』、および日本語学習者の談話レベルでの表現使用の分析に向く『BTSJ 日本語自然会話コーパス (BTSJ)』の三つの学習者コーパスを駆使し、それぞれのコーパスの特徴を生かした分析により、日本語学習者の副詞「やはり」の習得実態の解明に取り組んだ点に本論文の先駆性がある。

こうした特徴を有する本論文の構成は次のとおりである。

## 第1章 問題意識と研究課題

1. 研究背景と問題意識
2. 研究目的と研究課題
3. 本論文の構成

## 第2章 本論文の前提となる先行研究

1. 第2章の目的
2. 副詞「やはり」の品詞分類上における位置
  - 2.1 山田(1936)－語の副詞・陳述の副詞
  - 2.2 渡辺(1971・1974)－注釈の誘導副詞
  - 2.3 中右(1980)－命題外副詞・文副詞
  - 2.4 工藤(1980・2000、1982)－叙法副詞の下位区分
  - 2.5 宮島(1983)－消極的な呼応
  - 2.6 川端(1983)－予期や反予期
  - 2.7 西原(1991)－恒常的な認知体系が前提
  - 2.8 森本(1994)－SSA 副詞
  - 2.9 石黒(2023)－検討副詞 - 認定の副詞
  - 2.10 副詞の体系化を目指した先行研究
3. 副詞「やはり」の意味・機能に関する研究
  - 3.1 森田(1989)－基本的意味
  - 3.2 西原(1988)－語用論的前提の一つの類型
  - 3.3 森本(1994)－熟慮した結果であることを示すシグナル
  - 3.4 深尾(1995)－話し手が妥当だと考える判断
  - 3.5 蓮沼(1998)－基本機能と談話機能
  - 3.6 加藤(1999)－副詞「やはり」の研究史
  - 3.7 曹(2001)－順接と逆接の理論
  - 3.8 金谷(2017)－一致説の否定
  - 3.9 多様な意味・機能と問題の所在
4. 談話における副詞の働きに関する研究
  - 4.1 森山(1988・1989)－応答に関する研究
  - 4.2 中田(1991)－間つなぎ
5. 副詞「やはり」論で残された課題
6. 本論文における用語の定義
  - 6.1 意味・機能
  - 6.2 中心的意味とスキーマ的意味
  - 6.3 前提
  - 6.4 呼応と共起
  - 6.5 談話管理

- 7. 第2章のまとめ
- 第3章 副詞「やはり」の多義性考
  - 1. 第3章の目的
  - 2. 問題の所在
  - 3. 本章に関わる先行研究
    - 3.1 中心的意味を検討した研究
    - 3.2 多様な意味・機能の存在を検討した研究
  - 4. 「やはり」の多義的別義とスキーマ的意味の認定
    - 4.1 「やはり」の多義的別義の認定
    - 4.2 スキーマ的意味の抽出と認定
  - 5. 多様な意味・機能はスキーマ的意味からどのように生じるか
    - 5.1 金水（1992）の考察の検討
    - 5.2 金水（1992）と蓮沼（1998）の指摘を検討する
    - 5.3 多様な意味・機能はスキーマ的意味からどのように生じるか
    - 5.4 「やはり」の意味・機能を包括的に提示する枠組み
  - 6. 結論
  - 7. 第3章のまとめ
- 第4章 副詞「やはり」の異形態についての一考察
  - 1. 第4章の目的
  - 2. 問題の所在
  - 3. 本章に関わる先行研究
    - 3.1 副詞「やはり」の意味・機能に関わる研究
    - 3.2 副詞「やはり」の異形態に関わる研究
    - 3.3 本章の目的
  - 4. 調査の概要
    - 4.1 調査の方法
    - 4.2 使用データ
  - 5. 副詞「やはり」の4形態を使用する人数からみた母語話者の使用傾向
    - 5.1 CEJCにおける4形態の使用人数と割合
    - 5.2 個人が使用した形態の種類
    - 5.3 属性の違いによる異形態の使用数と使用人数
    - 5.4 CEJCにおける副詞「やはり」の使用傾向考
  - 6. 母語話者は「やっぱり」と「やっぱ」を使い分けているか
    - 6.1 「やっぱり」「やっぱ」の出現位置と意味・機能
    - 6.2 「やっぱり」「やっぱ」のアクセント型
    - 6.3 「やっぱ」はやはり「やっぱり」とは違うのか
  - 7. 結論

8. 本論文の位置付け
  9. 第4章のまとめ
- 第5章 研究方法と対象とするコーパス
1. 第5章の目的
  2. 研究方法
    - 2.1 コーパスを用いた研究
    - 2.2 3種類の学習者コーパスを調査対象にすること
    - 2.3 意義と限界を踏まえた解釈
  3. 対象とするデータ概観
    - 3.1 I-JAS (International Corpus of Japanese as a Second Language)
    - 3.2 B-JAS (Beijing corpus of Japanese as a Second language)
    - 3.3 BTSJ (Basic Transcription System for Japanese)
  4. 第5章のまとめ
- 第6章 学習者横断コーパスから見た副詞「やはり」
1. 第6章の目的
  2. 問題の所在
  3. 本章に関わる先行研究
    - 3.1 副詞「やはり」の意味・機能に関わる研究
    - 3.2 副詞「やはり」の異形態に関わる研究
    - 3.3 学習者の習得に関わる研究
    - 3.4 本稿の目的
  4. 調査の概要
    - 4.1 調査の方法
    - 4.2 使用データ
  5. 副詞「やはり」の出現数、形態から見た使用傾向
    - 5.1 母語別の使用数から見た使用傾向
    - 5.2 出現形態から見た使用傾向
  6. 副詞「やはり」の出現位置と意味・機能から見た使用傾向
    - 6.1 副詞「やはり」の発話における出現位置
    - 6.2 I-JAS データに出現する副詞「やはり」の意味・機能
    - 6.3 副詞「やはり」の出現位置と意味・機能から見た使用傾向
  7. 結論
  8. 第6章のまとめ
- 第7章 学習者縦断コーパスから見た副詞「やはり」
1. 第7章の目的
  2. 本章に関わる先行研究
    - 2.1 副詞「やはり」の意味・機能に関わる研究

- 2.2 副詞「やはり」の形態に関わる研究
- 2.3 副詞「やはり」の習得に関わる研究
- 3. 調査の概要
  - 3.1 使用データ
  - 3.2 調査方法
- 4. 副詞「やはり」の出現数、形態の変化
  - 4.1 副詞「やはり」の出現数の変化
  - 4.2 B-JAS 学習者が使用した形態の変化
- 5. B-JAS 「やはり」の用例の質的分析
  - 5.1 意味・機能の使用の変化の概要
  - 5.2 B-JAS の副詞「やはり」の用例の質的分析の手順
  - 5.3 学習者 CCB10 の副詞「やはり」の使用の変化
  - 5.4 学習者 CCB07 の副詞「やはり」の使用の変化
  - 5.5 学習者 CCB05 の副詞「やはり」の使用の変化
  - 5.6 その他の学習者の用例
- 6. 結論
- 7. 第7章のまとめ
- 第8章 自然会話コーパスから見た副詞「やはり」
  - 1. 第8章の目的
  - 2. 第8章に関連する先行研究
    - 2.1 接触場面に関連する先行研究
    - 2.2 副詞「やはり」に関する先行研究
  - 3. 調査の概要
    - 3.1 調査方法
    - 3.2 対象とするデータ概要
  - 4. 副詞「やはり」の出現率
    - 4.1 会話の属性、関係の親疎別の出現率
    - 4.2 発話中での出現位置ごとの出現数
  - 5. 副詞「やはり」の出現環境
    - 5.1 フィラーに後接して出現する副詞「やはり」
    - 5.2 発話開始部で応答詞・フィラーを伴って出現する副詞「やはり」
    - 5.3 発話中間部で逆接・順接の接続表現に後接して出現する副詞「やはり」
    - 5.4 発話終了部に出現する副詞「やはり」
  - 6. 結論
  - 7. 第8章のまとめ
- 第9章 日本語教育への提言
  - 1. 第9章の目的

2. 学習者の副詞「やはり」の使用傾向
    - 2.1 I-JAS インタビューデータにおける学習者の使用傾向
    - 2.2 B-JAS インタビューデータにおける学習者の使用傾向
    - 2.3 BTSJ 雑談における学習者の使用傾向
    - 2.4 学習者の副詞「やはり」の使用傾向
  3. 学習者の使用教材
    - 3.1 日本語教材の中の副詞「やはり」
    - 3.2 I-JAS の JFL 環境の学習者と B-JAS の学習者が使用した教材
  4. 日本語教育への提言
    - 4.1 副詞「やはり」の指導の方向性
    - 4.2 副詞「やはり」に多様な意味・機能が生じる理由
    - 4.3 母語話者が談話で副詞「やはり」を多用する理由
    - 4.4 母語話者は副詞「やはり」の異形態をどう使っているか
    - 4.5 副詞「やはり」の方略的使用と様々な表現効果
    - 4.6 意図せず対話の相手を不快にしてしまう副詞「やはり」の使用
  5. 第9章のまとめ
- 第10章 本論文の結論と今後の課題
1. 第10章の目的
  2. 本論文の概要
  3. 本論文の結論
    - 3.1 研究課題1)の結果—第3章
    - 3.2 研究課題2)の結果—第4章
    - 3.3 研究課題3)-1の結果—第6章
    - 3.4 研究課題3)-2の結果—第7章
    - 3.5 研究課題3)-3の結果—第8章
    - 3.6 学習者の副詞「やはり」の使用傾向
    - 3.7 研究課題の結果を踏まえた日本語教育への提言
  4. 本論文の意義と今後の課題
    - 4.1 本論文の意義
    - 4.2 今後の課題
  5. 第10章のまとめ

参考文献

資料編

## 2. 本論文の概要

本論文は、話し言葉における副詞「やはり」の多義性と、学習者と母語話者の使用実態を論じ、得られた知見を日本語教育へ応用することを目的としている。副詞「やはり」は、母

語話者の会話で多く用いられること、辞書的な意味の理解が産出に直接結びつく語と異なり、多義的で中心的意味の他に派生した意味を持つこと、「やはり」「やっぱり」「やっぱし」「やっぱ」の4種類の異形態が並行して用いられていることが、まず特徴として挙げられる。また、談話において副詞「やはり」を使用することにより、話し手は聞き手に自分の心情を推測させる手がかりを提示できる一方、聞き手は話し手の意向を推測する手がかりとして活用できる側面を持っているとされる。

従来の副詞「やはり」の研究の多くは、母語話者研究者の内省・新聞・雑誌・小説・シナリオなどの用例によるものであり、書き言葉に近い用例からの調査・検討が中心であった。これにたいし、本論文では、副詞「やはり」の複雑さの解明を学習者の産出から探るアプローチが取られている。そうしたアプローチ選択の理由として、話し言葉における副詞「やはり」の学習者の使用実態を明らかにすることができる点、学習者の副詞「やはり」の理解と産出に内在している難しさの内実を直接探ることができる点、学習者の産出から見ることで母語話者が気づきにくい副詞「やはり」使用の側面をあぶりだせる点が挙げられる。

現在、副詞「やはり」の研究は、形態的バリエーションや多様な意味・機能を中心に、母語話者の使用をめぐって議論が進む一方、日本語教育のための学習者の使用実態の調査は不足している。このため、本論文では、複数の学習者コーパスを調査することによって、副詞「やはり」の学習者の使用実態を分析し、この調査結果を踏まえた日本語教育への応用を検討している。

第1章では、まず上述の研究背景と問題意識を提示する。そして、発話時に発話者の認識の在り方を反映する意味・機能を持つ副詞「やはり」を話し言葉のコーパスを用いて多角的に研究し、談話教育・日本語教育に資する知見を得るという研究目的を述べ、研究課題を以下のように設定し、全10章から成る本論文の全体像を示す。

研究課題 1) 副詞「やはり」の多様な意味・機能を包括的に記述できる枠組みとはどのようなもので、かつそうした枠組みから多様な意味・機能がどのように派生するか。(第3章)

研究課題 2) 副詞「やはり」の異形態を母語話者はどのように使い分けているか。(第4章)

研究課題 3) 学習者と母語話者の、副詞「やはり」の使用実態はどのようになっているか。

1. インタビューデータにおける学習者と母語話者の使用実態は、使用数、形態と出現位置、意味・機能の面からどのようになっているか。(第6章)
2. インタビューデータにおける学習者の使用の変化は、出現数、形態、意味・機能の面からどのようになっているか。(第7章)
3. 雑談データにおける学習者と母語話者の使用実態は、会話の属性、対話相手との関係の親疎でどのような異なりがあるか。(第8章)

第2章では、副詞「やはり」の先行研究を概観する。まず、副詞「やはり」の副詞分類上の位置を確認し、次に副詞「やはり」の多様な意味・機能を検討した研究、談話における副

詞の働きを論じた研究を検討する。その結果、先行研究で残された課題として、多様な意味・機能間の関係を考察した研究は不足していること、実証的データを用いた学習者・母語話者の使用実態の調査と検討は十分でないことの2点が存在することを確認する。

本論文の基礎的研究として位置づけられる第3章と第4章では、副詞「やはり」の多義性を論じ、母語話者の副詞「やはり」の異形態の使用実態を調査している。

第3章では、副詞「やはり」の多様な意味・機能を包括的に記述できる枠組みを検討し、次の3点を記述する。①副詞「やはり」のスキーマ的意味は「話し手の概念内の何らかのもの」と照合し、一致したことを表す」であり、副詞「やはり」が照合する「概念内の何らかのもの」の内実により異なった意味・機能が生じる。②副詞「やはり」は事実由来の認識と思考由来の認識の両領域に働く副詞であり、事実由来の「やはり」では話し手の原認識と対立認識にたいする期待の強弱により、思考由来の「やはり」では、逡巡の度合いの強弱と判断過程のどの段階で発話するかにより異なった意味・機能となる。③前提命題との一致で説明できない「やはり」は、判断の過程も含めて表現される談話において、逡巡に重きが置かれた結果、スキーマ的意味が希薄化したため生じる。

第4章では、副詞「やはり」の異形態を母語話者はどのように使い分けているかを『日本語日常会話コーパス (CEJC)』を用いて調査する。副詞「やはり」を使用した人に焦点をあてた調査から、次の4点の調査結果を導きだしている。①「やっぱり」は使用数だけでなく、使用した人数も対象者の8割で最も多い。「やっぱ」はそれに次いで全体で7割強の人が用いており、使用する世代も10代、20代の人のみでなく全世代にわたっている。②副詞「やはり」の4つの形態のうち1形態のみを用いている人は全世代にわたり4割強存在する。③「やっぱり」と「やっぱ」の使い分けでは、「やっぱり」は一語文での出現が、「やっぱ」は節頭での出現が有意に多い。④「やっぱり」のアクセント型は中高型がデフォルトである。「やっぱ」のアクセント型は頭高型の出現が多い。

第5章から第8章では、学習者コーパスの調査・検討を行っており、第5章では、第6章から第8章の前提となる本論文における調査方法、コーパスを用いた研究の意義と限界について言及し、調査対象とする3種類の学習者コーパスを概観する。

第6章では、学習者と母語話者の使用実態の比較ができる『多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS)』のインタビューデータを用い、副詞「やはり」の使用数、形態、出現位置、意味・機能から見た使用実態を調査したもので、その結果は次の①～③のとおりである。①副詞「やはり」を使用した学習者は全体の4分の1であるのにたいし、母語話者は対象の全員が副詞「やはり」を使用している。また、使用した個人の平均も学習者の2倍強使用しており、本データの調査では母語話者の副詞「やはり」の多用が観察できる。②副詞「やはり」の3形態では、学習者は「やっぱり (79.9%)」「やはり (16.1%)」「やっぱ (4.0%)」の順に、母語話者は「やっぱり (75.5%)」「やっぱ (20.1%)」「やはり (4.3%)」の順に使用している。学習者の「やはり」「やっぱり」の使用は学習者が使用した教材に関係がある一方、母語話者は、初対面のインタビュアーとの会話で、「やっぱ」は年代に関わらず50%以上の人がか用いている。③学習者と母語話者の副詞「やはり」の出現位置と意味・機能



の調査から、学習者は発話開始部での出現が有意に多く、インタビュアーの質問にたいして回答する際には「熟考した結果」の用法で用いられている。母語話者は発話中間部での出現が有意に多く、複文の中で逆接・順接の接続表現に後接する環境で、会話の前提や共通基盤を述べる際に用いており、意味・機能では「同様に」の用法での使用が多い。

第7章では、『北京日本語学習者縦断コーパス (B-JAS)』のインタビューデータを用い、副詞「やはり」の学習者の使用の変化を出現数、形態、意味・機能の面から調査したもので、その結果は次の①～④のとおりである。①日本語の習熟度が上がるとともに副詞「やはり」の出現数は増加している。②8回の調査における副詞「やはり」の形態の変化では、「やはり」は出現数が多いが、第5回の調査がピークでその後は使用が漸減する一方、「やっぱり」は「やはり」よりもやや少ないが、第6回と第7回で逆転し、「やはり」よりも多くなり、「やっぱ」は日本留学から帰国後の第7回、第8回の調査で出現するようになる。③学習者の副詞「やはり」の用法では、「熟考した結果」「形式・内容を選択途中」の用法が多く、次いで「同様に」「予期した通り」の用法が多い。④用例の質的分析から、日本語のレベルが上がることで、日本への留学という状況や、副詞「やはり」を使わざるを得ない話題や文脈があることにより、副詞「やはり」の意味・機能の使用の幅が広がっていく。

第8章では、『BTSJ 日本語自然会話コーパス (BTSJ)』の雑談データを用い、会話の属性と対話相手との関係の親疎から、副詞「やはり」の学習者と母語話者の使用実態を調査したもので、その結果は次の①～⑤のとおりである。①対話相手との関係別（親疎）による副詞「やはり」の出現率の傾向は、学習者は「初対面会話」より「友人との会話」のほうが高いのにたいし、母語話者は「初対面会話」のほうが「友人との会話」より高くなっており、母語話者と学習者で出現率が逆になっている。②会話の属性による副詞「やはり」の出現率の傾向は、「接触場面」より「母語場面」のほうが高くなっている。③発話開始部で応答詞とフィラーに後接して副詞「やはり」が出現する割合は、学習者は母語話者より低く、フィラーとの共起では、インタビューデータとの相違が見られる。④発話中間部では、逆接の環境で出現する割合は学習者 22.9%、母語話者は 24.4%と同程度の出現だが、順接の環境での出現は学習者は 5.7%、母語話者は 16.3%であり、学習者のほうが出現する割合は少ない。⑤発話終了部の副詞「やはり」は言い切りの直後（倒置）か、別の後続発話に吸収される環境（言い淀み・会話挿入）で出現する。言い切りの直後に出現する副詞「やはり」は、言い切ったことへの和らげ・相手への配慮を表している。

第9章では、本研究から得られた知見に基づいて、日本語教育への応用を検討する。本研究で設定した研究課題に対応した調査の結果と、学習者の使用傾向と学習者の使用教材の調査を踏まえ、日本語教育における副詞「やはり」の指導の時期・指導項目・提出順が次のように提案されている。①副詞「やはり」を発話時に発話者の認識の在り方を反映する意味・機能を持つ副詞の一群の一つとして、学習者のレベルが中級後半から上級前半の段階で、談話教育の一環として指導する。②指導項目と指導の手順は、副詞「やはり」を初級の後半に語彙として指導したあと、i) 副詞「やはり」に多様な意味・機能が生じるメカニズムと ii) 母語話者が副詞「やはり」を多用している理由⇒iii) 副詞「やはり」の異形態を母語話者は

どう使用しているか⇒iv) 副詞「やはり」の談話での使用(多彩な表現効果)とv) 副詞「やはり」の談話での使用(注意が必要な用例)の順に指導する。

第10章では、研究の概要と本研究で得られた結論を研究課題に従って述べ、本論文の意義と、本論文を通じて顕在化したさらなる問題意識を、今後の課題として記述する。本論文は、話し言葉における副詞「やはり」にたいし、母語話者コーパスと学習者コーパスを用いて、意味論、語用論、社会言語学、および第2言語習得研究の観点からアプローチする多角的研究を行ったものとまとめられる。今後の課題としては、本論文はコーパスを用いた「定性的研究と定量的研究が相補的な関係となる」ことを体現する研究を目指したが、コーパスの定量的調査から導かれる実態の記述に留まっていること、コーパスの調査を通じて抽出された個々の課題について、それが何に起因するかを説明するための理論を究明するための定性的調査が必要であることが述べられる。

### 3. 本論文の成果と問題点

本論文の成果は次の4点にまとめられる。

第一は、話し言葉を中心に頻用される副詞「やはり」について、多様な意味・機能を包括的に記述できる枠組み(スキーマ)を措定し、そこから多様な用法が派生するメカニズムを堅実な方法で記述した点である。ある文法形式にたいする優れた文法記述は、意味論と語用論を峻別し、当該形式が有する意味論的スキーマを抽出し、それが具体的な文脈のなかで多様な意味を帯びるという手続きを踏むという共通性を有するが、本論文もそうした優れた手続きを踏襲し、副詞「やはり」の多岐にわたる用法の整理に成功している。

第二は、副詞「やはり」の使用、とくに「やはり」「やっぱり」「やっぱし」「やっぱ」といった異形態の分布の偏りについて、『日本語日常会話コーパス(CEJC)』を用いて、年代、性別、場面、相手といった多様な観点から丁寧に記述し、実態を明らかにした点である。「やっぱり」の使用範囲が広く、使用頻度が高いことは容易に想像がつくが、「やっぱ」においても同様な傾向があり、年代を超えて広く使用されていることを明らかにするなど、丹念な調査により初めてわかることは少なくない。

第三は、副詞「やはり」がなぜ学習者にとって難しいのか、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス(I-JAS)』『北京日本語学習者縦断コーパス(B-JAS)』『BTSJ日本語自然会話コーパス(BTSJ)』という三つの代表的学習者コーパスを併用し、それぞれのコーパスの特徴を生かして定量的・定性的に明らかにした点である。副詞「やはり」は学習者の使用が基本的に少ないが、日本語のレベルが上昇したり滞日経験が蓄積したりするなかで副詞「やはり」、とくに「やっぱり」の使用が増え、さらに「やっぱ」の使用が現れること、また、副詞「やはり」の多様な用法のなかで、学習者が容易に習得しやすい用法、次第に習得が可能になる用法、習得がきわめて困難な用法があることを用法別に明らかにした点など、日本語教育に与える知見は少なくない。

第四は、副詞「やはり」の指導法を明確にした点である。副詞「やはり」に限らず、主観を表す副詞は、話し手のなかで論理関係を自分なりに設定するもので、語彙的にも文法的に

も扱いにくいことが多い。しかも、そうした副詞の一部は話し言葉のなかで多用され、用法も多岐にわたり、習得は難しい。しかし、副詞「やはり」について上述の観点を生かしつつ、指導の時期、指導項目、提出順などを習得過程に基づいて整理し、具体的な指導法を構想した点で、今後、他の高頻度副詞を調査・分析するさいにも参考にできる点が多いと見こまれる。

一方で、こうした優れた点を備えた本論文にも、問題点が存在する。

第一は、副詞「やはり」のみを扱っているため、意味的に隣接する副詞の相違点がわからない点である。たとえば、「もちろん」「たしかに」といった類似の意味を持つ表現との異同を考慮しつつ副詞「やはり」の分析を行えば、論証により厚みが加わったと思われる。

第二は、学習者コーパスの分析では三つの異なるコーパスの特徴を生かした分析になっている一方で、母語話者コーパスの分析では『日本語日常会話コーパス (CEJC)』のみの分析になってしまっている点である。たとえば、独話中心の『日本語話し言葉コーパス (CSJ)』の分析があれば、対話と独話の相違点が可視化できた可能性があり、1950～70年代の話し言葉を収めた『昭和話し言葉コーパス (SSC)』の分析があれば、時代による「やっばし」の特徴が抽出できた可能性があると考えられる。

第三は、データの提示の仕方の工夫である。本論文には多くの表が使われており、それが本論文の説得力につながっているが、個々の分析においてさらに下位分類の表が整備されているとわかりやすいと思われる箇所が散見された。よりきめ細かいデータ提示の工夫があれば、読者の理解も進み、説得力は増したように感じられる。

本論文にはこうしたいくつかの問題点は見られるが、これらは本論文が達成した高い学術的成果を損なうものではない。また、こうした点については、著者にも十分な自覚が見られ、今後の研究において、さらなる考察の深まりが期待される。

#### 4. 結論

以上から、本論文が学位論文に値する優れた研究であることを認め、鈴木英子氏に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であるとする。

## 最終審査結果の要旨

論文審査委員 石黒 圭  
庵 功雄  
小磯花絵

2024年1月26日、学位請求論文提出者、鈴木英子氏の論文「話し言葉における副詞「やはり」の多角的研究」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのにたいし、鈴木英子氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、鈴木英子氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験において合格と判定した。